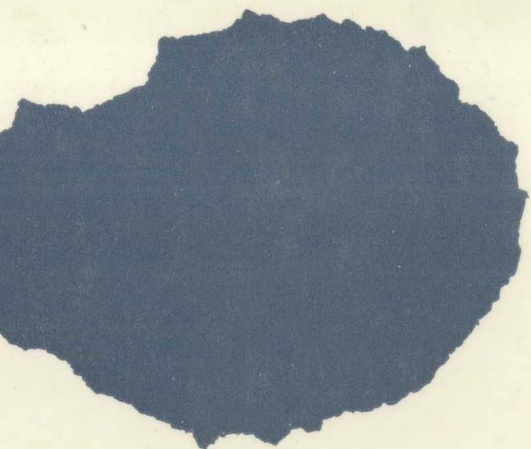


わが遍歴の山河

東 山 魁 夷



わが遍歴の山河

東山魁夷

新潮社版



亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信保宛御送付下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。

わが遍歴の山河

昭和三十二年五月二十日 發行
昭和五十五年二月二十五日 十七刷

著 者 東 山 魁 夷

發行者 佐 藤 亮 一

印刷者 塚 田 益 男

發行所 株式會社 新 潮 社

郵便番 東京 都 新宿 區 矢 來 町 一六二

電話業務部・東京(03)二六六一五一

編輯部・東京(03)二六六一五四一
振替東京四一八〇八番

定 價 九八〇圓

……目次……

わが遍歴の山河

追憶の港……………五

山　　國……………一七

歐洲の旅　その一……………二七

歐洲の旅　その二……………四三

歸　　國……………八七

北と南の間……………九七

新　　居……………一二五

大陸の旅……………一二五

戦　　火……………一三三

一筋の道……………一九九

作品集……………卷末

わが遍歴の山河

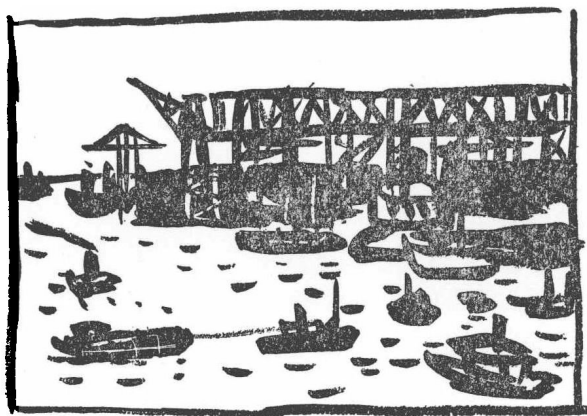
Nun reicht mir Stab und Ordenskleid
Der fahrenden Scholaren !

Ich will zur schönen Sommerszeit

Ins Land der Franken fahren !

さあ旅職人の杖と服を渡しておくれ、
この美しい夏の日にフランケンの地へ
旅立とう。

追
憶
の
港



いわば、これは私の徒弟時代とも云うべき遍歴の日の物語です。人生の月日が、まだたつぷりと自分に在ると感じていた若い時に、いろ／＼な廻り道をしながら辿つて來た旅路、あの俳人が云つたように、考え様によつては、生きていること自體が旅でもあるのでしょうか、私の場合は、比喩的な意味でなく、實際に旅によつて自己が徐徐に形成されて行つたのです。今日、風景畫家と云うことになつた私には、殆んど旅に明け暮れしていた過去が、別に不思議でもないわけですが、世の多くの人々から見れば、或は少し風變りであつたかもしれません。

それにしても繪を描くことに眞剣であれば、こんな拙い古風な文章を書いている餘裕なんか無い筈なのですが、初め、私はスケッチブックを開いて、旅の好きな若い人に話しながら見て貰う、ごく氣輕な氣持で始めたものです。然し、仕事場と家庭の茶の間の間に規則的な日々を送る最も多くの人々にも、私のこの旅と自然の物語は、何か郷愁のようなものを感じてくれるかもしれないと考えたものですから、私の遍歴

を少し詳しく書いてみることにしたのです。

今、この話を始めようとするのは、私がヴァンダーブルシュ（遊歷徒弟）からマイスター（師匠）になつたと云う意味ではありません。初心を尊ぶこの道では、永久にマイスターになんかならない方が幸いでしよう。たゞ、私達が山を歩いている時に、一寸した峠に一休みして振り返つてみる必要があるでしょう。それまで夢中で辿つて来た道が遙か彼方の麓の方まで蜿蜒と見えているが、もう少し先へ進むと道が曲つて、すつかり見えなくなつてしまうと云う位置があります。遠く過ぎ去つた青春ではあるが、まだ今でもいろんなことが見えている。然し、これから先になると、だん／＼忘却の霧の中に消えてしまふような年齢——そんな年齢に達したと思うからです。

勿論、私も友情や戀愛、人間と人間の間にある愛や憎しみ、善意と惡徳、世の中の移り變り、そう云うものを通じて自己が形成されて來たのですし、勉學によつて得た知識や、讀書によつて物の考え方を育てられたのですが、その方に重點がかゝると一篇の告白小説になつてしまいます。それは私の領分ではありません。

人間と自然、それが對立する存在か、大きな營みの中の一體のものなのか私にはわかりません。たゞ、私に内在するものがそれに最もふさわしい形式をとる場合、自然

の中にあらわれるのです。だから、私の遍歴してゆく自然は、その時の私自身の反映でもあり、同時にその自然が私の中に反映して来て、私を形成してゆくとも云えるのです。

又、旅について考えてみると、旅そのものは（いくら私が旅を多くしていても）日常とは違つたものであつて、何かしら私を刺戟して精神を緊張させると同時に解放感を伴うものです。純粹に自分自身になると云つた感じが強く起るものです。旅は私をそう云う心の状態にして、自然の前へ、又異國の街の中へ運んでくれるものです。

さて、この邊で、スケッチブックの最初の頁を開くことにします。誰でも旅の出發點は兩親の膝下であり、兄弟の團欒する故郷の家からでしょう。そこで私も少年の日を過した神戸のことを書きましょう。

「もう間もなく、神戸です。」とボーイに起されたが、私は暫く前から眼がさめていた。船室の窓からのぞくと、まだ暗い海上に市街の灯が點々と見えている。甲板へ出ると、川崎造船所のガントリークレーンが霞んで見え、市街の背後の山々の肌がわずかに明るんでくる。船を下りて、タクシーをひろい神戸驛へ行つた。驛の食

堂で簡単な朝食をとり、驛前から市電に乗った。線路の両側に黒い柵があつて、草が生えているところが妙に懐しかった。西出町で降りると、もとの毛織會社の赤煉瓦の建物が昔のまゝに立っていて、その邊に少しばかり古ぼけた家が残っているが、あとは焼跡のバラック建で、全くなじみのない道が一直線に走っている。そして、もとあつた細い道——病院の角をまがつて、私の両親の家があつた土蔵造りの二階家の家並は跡かたもなくなつてしまつた。小學校の塀にそつてぐるつと廻つてみると、又もとの電車道に出てしまう。この邊だと見當はつくが、まるで様子が變つてゐる。鎮守稻荷がそのまゝ残つてゐるので赤い鳥居をくゞつて入ると、平經俊の小さな五輪の墓が昔のまゝの姿だつた。たばこ屋も残つてゐるので、その店へ入つて、「この邊に東山と云う船具店があつたのを御存じですか」と聞いてみた。かみさんが「さあ……」と首をかしげて記憶がない様子である。

これは昭和二十九年の春、日展の高松での陳列を終えて、高知へ出て、船で神戸へ着いた時の手記の一節です。神戸は私の故郷とも云うべき土地でした。父の死と共に、すつかり神戸との縁が切れてしまつてから十一年目に神戸へ寄つた時は、こんな有様

でした。私は横濱で生れたのですが、四歳の時に神戸へ一家が移り、中學を終えるまで、住んでいた街です。

異國風な街、——戦後のそれと全く違つて、上品な古めかしいハイカラとでも云いたい香氣がありました。山手の屋敷町の静けさ。夾竹桃の咲いている庭を持つ瀟洒な洋館、明るい坂道に紫の影を落している楠。

外國通いの大きな船が出入りする突堤へ、中學生であつた私は親友とよく行つたものです。出帆の時の昂奮とか、船が見えなくなつてもまだ立ち去り難い別離の人々の表情とか……私達も外國へ行きたいと思ひました。

私の眼には、今でも「しまかみ」の棧橋の徳島行、淡路行と書いた赤い提燈が浮んで來ます。油粕の強い臭いのする倉庫のそばに、ギイ／＼と音を立てて帆柱をゆすりながらひしめきあつている小さな船。私の父は狭い横町の軒の低い土藏造りの家に東山商店と書いた眞鍮の看板をかけて、船具商をやつていました。

神戸市の到る處に源平時代や南北朝時代の遺跡があつて、平清盛の墓と云われた十三重の石塔のある邊りは寺が澤山ありました。張り子のお面を賣る店、兵庫の大佛、お彼岸かお盆だつたか母に連れられて、お寺で見た地獄變の繪圖、地藏祭りの夜など、

神戸は又、古い街でもあつたのです。

私の少年時代が幸福であつたと今でも思えるのは、神戸には山があり海があつたからです。須磨の海岸もその頃は文字通り白砂青松でした。淡路島——私がよく夏休みの數日を過していた志築の砂濱へはお盆の頃になると、大海龜が卵を産みに上つて來たり、洲本への斷崖を危げに馬車が通つていた時代ですから、今から考えるとすべてがのんびりしていました。

樂天家で、殆んど感情だけで生活している父と、悲しみを理性で抑えているような母、この極端に異質の二人の間には、相當深刻な問題があつて、まだ小學校へ入つたばかりの頃から、私は人間の間にある愛憎と、又その業とも云うべきものの姿を見て來たのです。従つて中學生の頃には、私自身すでに人を愛することの喜びと苦しみをはげしく味う人間になつていました。情熱に惑溺する偏向と、それを引き留めている理性との危いバランスが時々破れると、私は氣が變になりそうな苦しみに襲われるのです。そんな時、いつも私を慰めてくれたのは神戸をめぐる自然であり、又私にとつて救いとなつたのは繪に對する精進の道を選んだからのことであつたと思います。繪を描くことは幼い時から好きでしたが、その方面に何の關係もない家でしたから、

畫家になろうと決心して美術學校を受けるまでには、幾つかの曲折がありました。

小學校の頃は、大人になつたら偉い人になつて、母に樂をさせてやりたいと思つていました。その偉い人とは、絶対に畫家ではなくて、何か市民的な職業の成功者を頭に浮べていたのです。これにはわけがありました。その時分私の家は經濟的には困つていなかったのですが、母に樂をさせたいという希望は、普通ならそんなに強く起る筈はなかつたのです。然し、私は母が氣の毒で仕方ありませんでした。母は父の放埒な行爲に苦しんだ末、それが宿命的なものであることを諦観していましたが、その淋しそうな姿が、子供心にもたまらなく悲しいものに見えました。そんなわけで、將來いわれる偉い人になつて母を喜ばしたいと念願していたのです。母親に對するこの愛着は、私の中に根強い一面となつて、ずっと後まで續きました。この願望によつて、市民的生活に對する共感を植えつけられたものですから、それと藝術家的性格との相剋が早い頃から私を苦しめました。

こんなことがありました。中學校の裏山で寫生していると、その崖の向うから突然一人の男が現れました。男は崖の向う側の小徑を登つて來たのですが、私の位置から見ていると、妙に非現實的な現れ方に見えました。垢じみて粗末な服裝のその男は、

私の傍で見ましたが、

「君は繪描きになるのか。」とぶつきら棒に尋ねるのです。

私は突然の問いに一寸たじろぎましたが、

「僕は繪描きになんかならないよ。食えないもの。」と答えました。

「ふん。」と男は輕蔑の表情を浮かべながら、「君、野良犬だつて食つてゐる。餓死しないだけにはな。人間が食うために生きるのか。」

男の痛烈な言葉に私は赤くなつて黙つてしまいました。然し、心の中では、
「そんなことはわかつてゐる。だけど僕は野良犬はごめんだ。氣の毒な母が、なお悲しむからな。」と思つてゐました。

それでも、畫家になりたい氣持が強くなつて、中學校を終える頃漸く美術學校を受ける決心をしました。父は反對でしたが結局、

「身體の弱い子だから仕方がない。まあ、棄てたようなものだ。」と遂にあきらめたわけです。

東京の美術學校へ入學した爲、神戸の町と兩親の家から離れた日、期待と不安、喜びと悲しみの入りまじつた氣持で東京へ來て以來、休暇の時にたまに歸るとかのこと